

協同

[特集] 安全・安心な農畜産物の提供に向けて

2021
May
KYODO 5

兵庫の農業人
Hyogo-nougyoujin



タッグ! 兵庫の農業人

若者同士の関係構築により
地域の農業を切り拓く

Farmer × JA staff
大谷 圭祐さん
松本 学さん
詳細は
裏表紙へ

兵庫の農業人

生産者の皆さんとタッグを組んだ
多様な営農活動を紹介します。

タッグの様子は動画でも配信中!▶

▶ YouTube で 兵庫の農業・農協発信ch 検索



今月は JA加古川南

若者同士の関係構築により 地域の農業を切り拓く

トマトの結実を喜ぶ大谷さん(右)と松本さん



生産者

JA加古川南
トマト生産者

大谷 圭祐さん

ハウス栽培における先進的なシステム等新しい技術をどんどん取り入れ活用することで、トマト栽培を極めます!これからも、JAと共に消費者の方にもっとおいしいトマトを届けることができるように頑張ります!

JA職員

JA加古川南
営農経済センター

松本 学さん

トマトをはじめとした地域の農産物を、普段直売所を訪れないような幅広い層に知ってもらい、「美味しかった」という声をいただきたいです!今後も知識を吸収し、生産者の方々を支えられるように頑張ります!

JA加古川南に入組以来、約10年支所で信用・共済事業の渉外業務を担当していた松本さんが、令和2年度から営農経済センターへ配属され、初めて営農関係の担当となった。

肥料や農業に関する研修への参加や、出荷者との積極的な対話と情報交換により、営農に関する知識を蓄え、直売所「ファーマーズ」のより良い運営や組合員への支援に向け、取扱品目の増加や肥料のアドバイスに取り組んでいる。

地域内では数少ない若手生産者でファーマーズへの出荷者である大谷圭祐さんは、トマトのハウス栽培を行っている。大谷さんは、農業大学校を卒業した後、2年間の研修を経て、4年前に就農。「父もトマトの栽培をしていた影響で、小さい頃から農業に慣れ親しんでおり、父と同じ道に進もうと就農することを決めた」と話す。

就農後は、ハウス栽培用の環境自動制御システムを導入し、データで栽培管理する先進的な取り組みを行っている。

その結果、トマトの収量を8トンから20トンと約3倍に増加させることができた。同システムの導入に必要な資金は、JA職員から提案を受けたアグリマイティー資金を活用。

大谷さんは、「松本さんのような年齢の近い職員から気軽に情報収集できるよう、若手が農業をしやすい環境づくりをしてほしい」と、JAに要望する。一方、松本さんも、「大谷さんのような若い生産者と、地域農業について気軽に情報共有できる環境を維持していきたい」と話す。

今後も、若手の生産者とJA職員がつながりを大切に、地域の農業・農地の維持、振興に向けて取り組んでいく。

JA加古川南における地域振興の秘訣

新しい着眼点と想像力を持った
若者同士のフランクな会話の中から、
新しい取り組みを見つけ出していく